

空

両手をあわせる 平和な姿

いい手がある……

不安になって

気持ちが荒れて おちつけない

防衛的になってしまふ

そんご時

胸の前で

両手を合わせてみます

少し穏やかになれます

げんこつを握りしめて

振り上げてよりゾッと

「平和ないい手」を思い浮かべます

人類の宿題「平和」

庶民の大半が「戦争なんかマツピラごめんだ」と思っているのに、歴史的に時の為政者は度々「戦争をしないと国民の安全は守れないのだ」と言いつつ努力目標を戦争準備として、人類はずっとずっと戦争をくり返して来ました。

どうやら、個人の生き方と国家のあり方は別の次元の理屈があるようなのです。これってどうやら都合でどちらにも使い分けしているように思うのです。そこで疑問に思うのが「積極的平和主義」というような自己矛盾、自家撞着の表現が平然とされることですね。「平和」というのは武力を使わないこと、争わないことだとするのですが、その「平和」を守るための「戦争」をするということなのです。

てなわけで、「平和」というのは人類の永遠の宿題であるわけです。

その宿題を解く人は誰かと言えどもまぎれもなく、この時代を生きる僕らなのです。「そんな宿題をやっているヒマがあったら、敵に責められちゃうでしょ」と言う人がいます。子どもに

は「宿題しなさい」と言っているのに、いい大人が「宿題やってるヒマない」と言っちゃあマズイでしょ。

一つも努力しないで、「そんな宿題面倒だから歴史の上でできごと」に倣ってやっちゃえばいいや」と簡単に思うわけです。ところがドッコイ、人類の科学文明の進歩は想像を絶するほどスピードが加速していて、このスピードアップに身の危険を感じない人はさうとう呑気と言わざるを得ません。

その上に今まで通りの手法で本気で本腰入れて「争うこと」を修正できないのは危険極まりないので。

「教育」の根本改善を

さて、そこで、ぼくらに何ができるのかと言うことですが、100年後に人類や他の高等生物がこの地球にできるだけ苦しまずに存在し続けるために老いも若きも自らの「生き方」を問い直さなければならぬ時が来ているのです。もう、あっちこちで奪い合ったり、争い合ったりして自分の利益だけ守ろうなんてことを

考えている余裕はないのです。

何より「教育」を根本から改善しないとダメです。競わせて焦らせることばかり考えていては何のための「人生」なのか伝わらないのです。いろいろな意味で「自己形成」をすることが「教育」です。ですからどの人にも一生「教育」ということはついて回ります。その中でもとても難しいのが自分の「欲望」の取り扱いです。年をとると「欲望」は枯れてなくなるわけではありませんから、その年齢ごとに向き合わなければならぬのです。

時々「くだかけ」に登場する「三つの鍵」は単なる教訓や教えではなくて、「自己形成」の指針です。

ケチな根性はいけない
イヤなことはさげないで
ヨイことはする

たったのこれだけですが、これはとても面白い仕組みであることに気がつきます。今の「教育」の根本改善のヒントとなるものだ、最近思うようになりました。



自己形成の階段を昇って行く、自分の中のケチな根性が減っていくという仕組みです。これはとても面白いですね。人が何かしてくれるわけではありませんが「教育」です。自分で気がついて、この階段を一段づつ昇って行けるよう方向づけするのが「教育」の重要な内容なのです。

ケチのぶつかり合い

「戦争」ということはよく考えると「ケチ」のぶつかり合いです。気持ちが荒れるとつい防衛的になってしまいます。それから脱却することが人生の宿題でもあるのです。

今の「教育」はそこに視点がありません。あくまでもケチな根性のまま姿形だけ大人のものになっちゃってしまつて、本物の「おとな」にはなれません。「ケチ」が洋服をまといつていような大人を造ったところで人類は「平和」と言う「宿題」を解くことはできません。悲惨な戦争をくり返し、人間の歴史はこういうものに



山の茂吉(和田重良) 老話作家
1948年、小田原生まれ。東京教育大
学卒。くだけた生活(神奈川県丹沢山中)
を足場に共同生活(人生科や農作業中心)
の実践をおして、誰もが安心してそ
の暮らしを生きることを願い、35年以上に
わたって青少年や家庭の生活にさまざまな
メッセージを送り続けている。

若い人へⅠ 配布中(増刷しました)
若い人へⅡ 製作中(8月15日発行予定)

「おとな」は子どもに向き合う前に握りこぶしで準備するのではなくて、穏やかに両手を合わせてみてから向き合ってみれば「平和」は伝わって行くのです。